

岩屋神社は、宇多天皇時代（八七〇八九七年）の創建とされ、天忍穗耳命・栲幡千々姫命と、その息子である饒速日命の三柱が祭神として祀られています。

本殿の背後の行者ヶ森の中腹の「奥の院」に陰岩・陽岩と称する巨岩があり、この神域を「岩屋殿」と呼んでいます。今のような神社がなかつた時代の岩座信仰の名残といえます。社伝によれば岩座信仰は仁徳天皇二年からと伝えられています。



(八) 醍醐街道

だいごかいどう



醍醐街道には、元の旧渋谷街道の起点も含めて古くからの道が三箇所あり、現在も確認することができます。

四ノ宮川付近では、山階橋が一九二四年（大正一二年）架橋されたことにより、今の醍醐街道に経路変更されました。それ以前は四ノ宮川の西岸を山階小学校の東端に沿って街道があり、西野へ通じる道が接続するあたりで橋を渡って山科川に架かる東野橋へと向かっていました。

五条通を越えた所では、東野の古い町並みを通っていましたが、岩屋神社は、山科の歴史とともに

新道に経路変更されました。

柳辻で一旦外環状線と交差した後、一本道からは外環状線に入つて、小野歩道橋から南東に向かい、途中、京都市の保存樹である「かやの木」を見て、奈良街道に合流し、醍醐寺に向かいます。

一九〇九年（明治四二）年以前は、醍醐街道の西側を山科川が流れています。小野の歩道橋の辺りから西に流れていた中川は、山科川にあります。



69 山階小学校

山階小学校は、山科の歴史とともに校内には昔は山科村役場と交番がありました。村役場は1904（明治37）年頃、山階校より少し北側に移転しましたが、現在その場所は更地になっています。



山階校の校名扁額（まきむらまさなお）2代目京都府知事楳村正直の揮毫。

校門前の石組
1880（明治13）年からの石組です。

山科駅前から醍醐寺へ行く道を醍醐街道といいます。もともとは旧渋谷街道が起点でした。西側を山科川が流れています。また、京都市指定文化財である阿弥衣は、時宗独特の法衣です。

山科駅前から醍醐寺へ行く道を醍醐街道といいます。もともとは旧渋谷街道が起点でした。

山科駅前から醍醐寺へ行く道を醍醐街道といいます。もともとは旧渋谷街道が起点でした。

寺といえば、昔からその場所にあるイメージが強いですが、大宅奥山田の「歡喜光寺」は、一九七五年（昭和五〇年）、東山五条より山科に移転してきた寺です。その本堂は、移転に際し一日解体され、現在地に忠実に復元されています。また、京都市指定文化財である阿弥衣は、時宗独特の法衣です。場所は離れます、一九五五年（大正一四年）に国の重要文化財に指定された経蔵を有する、御陵大岩の「本因寺」も、一九七一年（昭和四六年）、京都六条（西本願寺北側）から、現在地に移転しました。

おもしろ! 引っ越してきた寺

小野地域の山の神の祭りは昭和三〇年代まで続いていました。毎年正月四日に御幣をつけた竹を手にして餅を持ち寄り、神木の杉の

年春に演じられました。「はねず」とは薄紅色を指す古語で、隨心院に咲く紅梅もこのように呼ばれていました。



七三（昭和四八年）



餅を二枚重ねて竹に刺して焼いて頂きます。



隨心院は第五世・増俊の時代に、曼荼羅寺塔頭のひとつとして建立。

68 山の神（小野）

たものです。「はねず踊り保存会」が結成され、一九九〇年に演じられました。「はねず」とは薄紅色を指す古語で、隨心院に咲く紅梅もこのように呼ばれていました。

巨木をお祀りします。時代とともに炭焼きや薪採りなどで日常、山に入る機会も少なくなり、祀りも細々となっていました。近年、小野地域の有志の方々の手によって復興されました。神木の杉の巨木は、工コランド音羽の杜入口の東側にあり、区民誇りの木になっています。

67 隨心院（はねず踊り）

隨心院は、平安時代の九九一年に仁海が一寺を建立し、一〇一八年に牛皮山曼荼羅寺と号しました。

牛を仁海が世話をしていく亡くしてしまい、悲しんだ仁海が、その牛の皮に両界曼荼羅を描いたと云うエピソードが伝わっており、それが寺の名前の由来となりました。一二九〇年には門跡寺院となっています。